

絆きずな 16号

平成28年12月15日

発行責任者：吉竹一泰

文責：中澤潤子

毎週木曜日は「人権学習の日」です。そして、12月3日～9日は『障害者週間』です。正しい理解と優しい心で、真の共生社会について考えましょう。自分の言動を振り返ったり、さまざまな人権問題について考えたりすることで、自分を磨いていく日にしましょう。

「笑顔のために」

私はかわいそうな子供なののでしょうか。私の家族は気の毒な家族なののでしょうか。

両親は、障害者です。父はまったく目が見えず、母は全く耳が聞こえません。父は鍼灸マッサージ師として働き、母は事務を執りながら私を育ててくれました。急いでいる時に少し困ることもありますが、あとは普通の生活です。

母は、文字を読み、私たちと筆談し、私の唇の動きで私の声を聞き、私に話しかけます。母の発声は他の人とは違いますが、家族には、ちゃんと母の声が聞こえます。

近所のおばさんが、こんな声をかけてきました。「いつも大変やね。えらいね、ようがんばっとるね。かわいそうやね。」と。

『かわいそうやね』。この言葉が一番ショックでした。私は、大変だとか、かわいそうだとか、不幸だなどとは思っていないのに。私たち家族のことをよく知りもしらない人に、『かわいそう』と決めつけられたのです。両親の愛情も苦勞も知らない人に、両親の心を、私たち家族を踏みにしられたような感覚でした。同時に、こんな風に同情の言葉だけ掛けて気の毒そうに見る人がたくさんいることが残念でした。『障害者』に育てられることはかわいそうなことなののでしょうか。

買い物に出かけた夕方。父と母がスーパーのレジに並んでいるのを見ていて、私は何だかうれしくなりました。父ができないことを母がカバーし、母ができないことを父がカバーして、店員さんと話をしているのです。「お父さんの目の代わりはお母さん、お母さんの耳の代わりはお父さんなんだ。」と改めて実感しました。同時に、私はこんなにすばらしい親の子供なんだと誇らしく思ったのです。

第29回全国中学生人権作文コンテスト 内閣総理大臣賞受賞作品より 一部抜粋

この詩を読んで、どんなことを感じますか？感じたことや思ったことを書きましょう。

1年

☆僕は、障害者に育てられても全然かわいそうじゃないと思います。理由は、障害者であろうがなかろうが関係なく、一人の人間としてみてみたら、絶対に「かわいそう」だなんて思わないと思います。気の毒そうに見るのは、一人の人間として障害者の人を見ていないからそういうことを思ってしまうと思いました。

☆家族のことを知らないくせに、「かわいそう」と決めつけられるのはおかしいと思います。障害者に育てられることは、全然かわいそうなことじゃないと思いました。お父さん、お母さんが協力しながら互いに支え合って生きています。そのどこがかわいそうなのか僕には分かりません。

☆障害がある人を見ても「かわいそう」と言ったり思うことはよくないと思いました。理由は、障害があるだけで、他は普通の人とかかわらないのに、その人を差別しているみたいだからです。このように障害者どうして支え合っているのだから、私たちも助け合わなければいけないと思いました。

☆「助け合い」がやっぱり大切だなあということを感じました。しかし、障害者が家族にいただけで、「かわいそう」と決めつけられていることがだめだなあとと思います。こんな言葉をかけて落ち込ませるのではなく、「助け合い」を大切にしながら私も生活していきたいです。

2年生

☆障害者をかわいそうだと思うのは、偏見でしかないと思います。そのような偏見がなくなっていけば障害者の人たちが気持ちよく生活していけるとと思います。その中で、できないことをカバーしてあげられる人になりたいです。

☆自分が思っていないことを決めつけられることはとても悲しいと思います。でも、障がい者だからかわいそうと言った人はどんな気持ちで言ったのか分かりません。障がい者のどこがかわいそうなのか、そんなことを言ったら相手はどう思うか自分も考え直したいです。

☆普通の一般家庭の子どもでも障害者の両親の子どもでも、親の愛情は変わらずたくさん与えられていると思うので、かわいそうなんかじゃないと思います。自分の家庭で愛情などのぬくもりが感じられていたら少しもかわいそうな家庭ではないと思います。

☆周りの人が感じたことが本人が思っていることではないと思います。声をかけることはいいと思うけど、勝手に思ったことを言って決めつけてはいけないと思います。できないことがあっても助け合いをするとお互いうれしくなると分かりました。

☆正直私も生活は大変じゃないのかなと思ってしまったけれど、それは、「かわいそうやね」という言葉とあまり変わらないと思いました。だから、私もひどいことを言っているのと同じだなと思いました。目が見えないから、耳が聞こえないから大変とか、かわいそうと決めつけてはいけないと思いました。

3年生

☆まず、「障害者週間」という言葉が気になりました。この言葉が差別をしているように感じられました。そして、「かわいそう」という言葉は、一番人を傷つける言葉だと思います。全員が平等に優しい心で接していかなければいけないと思います。

☆障害のある方が「かわいそう」という感覚はとても失礼だし、傷つけることばでもあると思います。障害がある方でも、その人にとっての幸せがあると思うので、すべて決めつけてかかるのはよくないと思います。目の見えない父、耳が聞こえない母、その二人がお互いを支え合って生きているというところに感動しました。

☆「障がい者的人是かわいそう」それは、障がい者的人を大きく傷つける言葉だと思います。そして、その周りの人をも傷つける言葉ではないかと私は思います。お互いがお互いを尊重しあうこのお話の母と父のようになれば、正しい理解をし助け合うことができれば、真の共生社会へと、日本は、世界はなっていくと思いました。

☆お互いができないことをおぎないあう。これこそ素晴らしい共生だと思った。しかし、この文章とは関係ないのだが、私は「障害者週間」という言葉に、何か心地の悪いものを感じた。というのも、「障害者」のことを考える週間とは、あきらかに障がい者とそれ以外の人とを区別した言い方だからだ。私は、真の共生社会をつくるためにはそのような区別をまず取り払うべきだと思う。その“区別”が助け合うという気持ちを妨害してしまうからだ。

☆見た目だけで、かわいそうだとか、大変そうだと言っははいけないと思います。私の兄も障害があり、見知らぬ人が小声で「大変そうかわいそう」と言われたとき、腹が立つのと同時に悲しくなりました。一人ではできないこともあるけれど、二人、三人になればできなかったことができる。私たちもみんなで助け合い、支え合って生活していければいいなと思いました。

※「国際障害者デー」と「障害者週間」について

12月3日は国際連合の国際デーの一つである「国際障害者デー」です。また、わが国では毎年12月3日から12月9日までを「障害者週間」と定めています。

「障害者週間」は、2004年（平成16年）6月の障害者基本法の改正により、従来の「障害者の日」に代わるものとして、「国際障害者デー」の12月3日から「障害者の日」である12月9日までの1週間について設定されました。国民の間に広く障害者の福祉についての関心と理解を深めるとともに、障害者が社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に積極的に参加する意欲を高めることを目的としています。

実際の暮らしのなかでは、まだまだ障害者に対する差別があります。障害がある人も、社会の中で、あらゆる活動に積極的に参加できるように、私たちは正しい理解をして、ともに歩める共生社会を実現していくことが必要ですね。

作文の続きを紹介します。

そして、そんな両親のそばで、弟はにこにこ笑っていました。その弟も病気です。原因はわかりませんが、たまに弟は「こんな風になりたくてなったんじゃないがんに・・・」と、泣きそうな顔で言っています。病気を治すための第一歩は勉強をすることなのだそうです。小さな弟は嫌がってなかなか両親の言うことを聞きません。父も母も障害をもっているのに、やはりそんなときは大苦戦です。それでも根気よく弟に話をする二人。困っている二人の姿と、嫌がって逃げようとする弟。私はというと、ついこの前までそんな3人を見て、いい加減にしてほしいと思っていたのです。

仕事の後、弟と一緒に勉強する父に、一度聞いたことがあります。「お父さん、嫌じゃないがん？イライラしんがん？疲れんがん？」すると父は、「やらなきゃだめなんや。あきらめたらそこで終わりや。」と言ったのです。私はハッとしました。「私は、弟や両親をなんて冷たい目でみていたのだろう。『障害』をあきらめずに私を育ててくれた両親が大好きなのに、なぜ二人の心を考えようとしなかったのだろう。なぜ、弟の病気をあきらめてしまっていたのだろう。」家族なのに、大切な3人なのに・・・。両親に甘えて、自分のことで精一杯だった私。恥ずかしさで一杯の私の顔が、父にはきっと見えていたことでしょう。

人間は、皆平等でかけがいのない存在。よく耳にする言葉です。でも、障害のある人もない人も平等なのだろうかとは私はずっと考えてきました。そして、少しずつわかってきたことがあります。

人は、一人ひとりが大切な存在。その人がいることが誰かの生きる力になり、喜びになる。たとえ苦しいことがあっても、その人の笑顔があれば、あきらめずにやっていける。そんな不思議な力がすべての人に平等に与えられているのではないのでしょうか。そして私の家族はきっとそんな力にあふれた家族です。

私は、弟の笑顔を見ているとホッとします。両親の笑顔も、見ているとホッとします。その**笑顔のため**に私が手伝えることは、もっとありそうです。だって、私は二人の娘なのですから。

石川県・羽咋市立羽昨中学校1年 藤岡はるか

